

## ブックトラックを読み解く

石川 敬史

### はじめに

返却図書の排架，書庫から図書館資料の出納，除籍図書の処理，図書の登録・受入，製本雑誌の排架など……，館内，さらには事務室内においてブックトラック（Book Truck）はいつも図書館員の隣にいる。図書館業務の中で特段意識されることなく，ブックトラックは日常的に何気なく使われている。しかし，運搬する資料の冊数に適したサイズを事務室内で探したり，購入時の価格・色・段数・サイズ・メーカーの選定，さらには館内・事務室内で同僚が使用中のブックトラックの譲り合いなど，図書館員がブックトラックを意識する場面ももちろんあろう。

そもそもブックトラックとは，「建物内で図書を運ぶために使用される2段か3段の棚状に作られた，車輪付きの運搬台」<sup>1)</sup>であり，「2～3段の棚のある，車輪付きの小型運搬車。図書館内の図書の運搬に用いる」<sup>2)</sup>とある。ブックトラックとは，図書館資料を運搬するための道具であり，まさに図書館員の「相棒」でもある。

### 歴史，そして現在

こうしたブックトラックの歴史については，すでに奥泉和久が紹介している<sup>3)</sup>。奥泉によると，1931年の間宮商店の定価表に「図書運搬車（Semi-steel Library Truck）」があるという。木原正三堂の1950年のカタログでも「図書運搬車」と記載され，1968年の同社のカタログから「ブックトラック」になったという。しかし，丸善の広告をみると，すでに1950年代はじめから「ブックトラック」と称していたとのことである。

キハラ株式会社の2017年カレンダーの表紙には「B型書籍運搬車（1964（昭和39）年～1974（昭和49）年カタログ掲載）」の写真が大きく掲載されている。ここには，「木製のブックトラックは，木原正三堂のカタログでは1951（昭和26）年よりみられますが，写真のB型（両面傾斜式）は1964（昭和39）年より，約10年間発売されていました。」とある。写真をじっくりみると，この「B型書籍運搬車」は木製3段式で，うち上段と中段が両面傾斜式の棚である。さらに同社の『図書館とともに：キハラ100年の歩み』<sup>4)</sup>を紐解いていくと，「病院などの巡回文庫用」で，「正面には雑誌架が，ハンドル部分には貸出カード入れが付いている」木製の「C型書籍運搬車」，スチール製の「パイプ書籍運搬車」，「パイプブックトラック」など，ブックトラックの系譜を確認できる。

現在のブックトラックの多くはスチール製であり，各メーカーの図書館用品カタログをみていくと，走行音や耐久性，安全性，デザインなどが追究されている。これに加え近年は，ブックトラックの定義をはるかに超えるさまざまな活動がみられる。例えば李明喜は，「図書館のプロダクト・デザインの変革はブックトラックから始まる」<sup>5)</sup>とし，人とモノとの相互関係という側面について指摘している。そこで本稿では，ブックトラックを取り巻くさまざまな活動を読み解きながら，そこに内包されている価値を考えていきたい。

### 本のチカラを運ぶブックトラック

病院図書館における入院患者サービスのひとつとして，ブックトラックによる病棟・病室への巡回は良く知られている<sup>6)</sup>。1966年，大阪赤十字病